本日のおすすめ。
SHINCHO CREST BOOKS

illustration by Ulala Imai

新潮クレスト・ブックス 2019-2020

［新刊インタビュー］ジュンパ・ラヒリ
［近刊紹介］ウェイク・ワン
ただいま翻訳中！ これから出るクレスト・ブックス
新潮クレスト・ブックス カタログ 1998-2019

SINCE 1998
CREST BOOKS
Shinchosha

孤独が背中を押してくれる。

2012年、家族とともにニューヨークから
ローマへと移住したラヒリ。
イタリア語による初エッセイ『べつの言葉で』を
経て、待望のイタリア語による長篇小説
『わたしのいるところ』を昨年発表。
訳者による解説を交えた新刊インタビューです。

ジュンパ・ラヒリ

Interview with Jhumpa Lahiri

聞き手　カロリーナ・ジェルミーニ
翻訳・注解　中嶋浩郎

interview

photographs Opale／アフロ

イタリア語による初の長篇小説『わたしのいるところ』の主人公は、ローマと思しき街にひとり暮らす45歳の独身女性。研究者の彼女は大学で教え、子ども時代から同じ地区に住んでいる。なじみの店や場所に身を置いていても、彼女はいつも孤独だ。孤独であることが、仕事でもあるかのように。

名前を取り去る

――『わたしのいるところ』では場所にも人物にも名前がありませんね。

少し前から、イタリア語で書くときにはすべてをより抽象的、より開かれたものにするために、特殊性をできるだけ排除しようとしてきました。わたしが執筆を始めたころは、あらゆるものごとがアイデンティティーを中心に回っていました。ある名前をもつことをめぐって一冊の本を書いたこともあります[訳者:長篇小説『その名にちなんで』のこと。「ゴーゴリ」

と名づけられたインド系アメリカ人の少年とその家族の物語。名前は一つのレッテルで、何かを説明するけれど、生まれや母語と同じように、自分で選ぶことができません。でも、一人の人間の本質は、押しつけられたものとは別のものですから、そこに衝突が生まれます。この衝突に興味があるんです。

いまわたしは、すべてをより抽象的なものにしようとする段階にいます。わたしにとって名前を取り去ることは、ある種の重荷からの解放なのです。『わたしのいるところ』では、ローマのようでローマでなくてもかまわない、ある町の名前を取り去っています。名前がなければ、境界ももはや成り立ちません。何かを取り除くことで、いろいろなものの意味が広がる。わたしはこの穴だらけの開かれた状態が気に入っています。

――主人公は自分をさらけ出したい欲求と自制する必要とのあいだでつねに揺れ動いています。外からの刺激を求めながら、そこから逃れなくてはといつも感じていますね。

ええ、それはこの本に出てくる数多くの矛盾の一つです。あらゆる意味で揺れ動いている作品なんです。ここで描かれる町にも二つの顔があって、生き生きしていながら死んでもいる。主人公は、外にでかけてはまた帰宅します。それが彼女の日常ですが、たぶんこれは誰にでも当てはまるでしょう。

わたしたちは自分の内と外の両方に空間をもっています。二つの空間の境界を突き止めたい。彼女はいつも境にいます。外に引きつけられ、それからまた内側に引っ込むのです。

揺れ動く主人公

――小説は道端の碑板という死のイメージで始まります。あなたはしばしば碑板、服喪、墓などの言葉を使いますね。この作品では場所が重要な役割を果たしていますが、死ももう一つの場所なのでしょうか？

『わたしのいるところ』には、神話的な鍵があると思います。彼女はペルセポネ［訳者：ギリシア神話の最高神ゼウスと穀物豊穣の女神デメテルの娘。冥界の神ハデスに見初められ、冥界に連れ去られて妃となる。デメテルが娘を探して放浪しているあいだ、大地は荒廃してしまったため、ゼウスの取りなしによってペルセポネは一年の三分の一を冥界で過ごし、残りは地上に戻って母と暮らすことになった］のような存在で、死と生のあいだを行き来しなければなりません。主人公と母との関係からも、この仮定は確かなように思えます［訳者：主人公が小さいころ、ひどく孤独を恐れる母は娘を片時も離そうとしなかった。主人公は「わたしたちは変質したアマルガムのよう」だったと回想する。いまは二人とも一人暮らしで、主人公は定期的に年老いた母に会いにいっている。母が「心の底ではあのアマルガムをつくり直して孤独を追い払いたいと思っている」ことを知りながら、この暮らしをやめるつもりはない］。

彼女は死や亡霊ととても深い関係をもっています。この本に神話的な表現がよく出てくるのは、わたしがローマを知り、この町の精神を吸収した結果かもしれません。子どものころから、物語や歴史の読みものを通して、ローマに古典的なイメージをもっていました。主人公の女性は場所とつながり、死や、もう存在しないものともつながっています。そして光のほうへも向かうのです［訳者：主人公の仕事場を前に使っていたのは詩人で、その研究室の静けさを愛し、泊まり込んで詩を作ることもしばしばだった。亡くなったのはその部屋でではなかったが、主人公は彼の何かが部屋に残っていると感じている。またべつの章では、神話の世界の生き物たちの彫刻に囲まれた庭

名前は一つのレッテルで、
何かを説明するけれど、
生まれや母語と同じように、
自分で選ぶことができません。

を散歩する老齢の男女が描かれる。女性のほうは難しい手術を終えたばかりらしい。手術のあいだはべつの世界にいて、ふたたびこの世界に戻ってきたのだろうと主人公は思う」。

――彼女を外の世界と隔てる境は生と死を分けている境と同じということですか？

もちろんその通りです。これが境です。この本には、存在することとしないことの絶え間ない緊張があります。自分が世界に存在していると感じるのは、彼女にとって一つの挑戦です。

――彼女は結びつきや従属関係を望まず、自分の家族にも属していないと感じています。彼女を不安にさせるのは、この根無し草の状況なのでしょうか？

そうとも言え、違うとも言えます。彼女は住んでいる地区、自分の日常生活に強く結びついていますが、そこに属することと離れることとのあいだでいつも揺れ動いています。英語で小説を書くようになってから、ずっと考えつづけているこのテーマを発展させ、掘り下げてみようと思いました。彼女は根を張ることの難しさに苦しんでいると同時に、自分の家を離れることに不安を感じてもいます。とどまりたい欲求とあらゆる境界を越えたい欲求に突き動かされているんです［訳者：主人公は変化を恐れている。「わたしに足りなかったのは前に踏み出す力だ」と感じ、自分の場所を離れるための一歩がなかなか踏み出せずにいるが、最後にある決心をする。「どこでもなく」の章にはその心境が記されている。「じっとしているどころか、わたしはいつもただ動いている」「通りすぎるだけでない場所などあるだろうか？」］。

――主人公の女性は、「八月に」の章で隣家の男が売り出すさまざまな中古品を買いますが、その次の章では、無駄なものを買うと不安な気持ちになると言っています。

こうした品物の交換にわたしはいつも心を打たれます。わたし自身も、ポルタ・ポルテーゼ［訳者：テーヴェレ川右岸地区にあるポルテーゼ門を起点とした道路で毎週日曜日の午前中に開かれるローマ最大の蚤の市］でいろいろなものを探すのが好きですし。無言のままあちこち移動してゆく品物のことを思うのも好きです。茶碗は自己表現ができませんが、このような交換によって、所属するということの意味がもっと広がるように思います。

これは彼女にとって、自分の孤独な生活に他人を迎え入れる手段なんです。そこにはつねに死との関係が存在します。もうこの世にいない女性の毛皮のコート、それを着ることは自分の存在確認であり、「今日、わたしは生きている」と言うための一つの手段なのです。

頭のなかの三つの部屋

――この小説では、時を表すタイトルのいくつかの章を例外として、多くの空間を表すタイトルがつけられています。また、「自分のなかで」というタイトルの章もいくつか出てきます。彼女がほんとうに生きているのは「自分のなかで」だけと言ってもいいのでしょうか？

photograph by Nobuni Aoki

「自分のなかで」というのは、このような二重構造の中で彼女が存在している世界です。彼女がいて、べつの自分がいます。これらの章を「わたしのなかで」ではなく「自分のなかで」と呼ぶところに彼女の疎外感があります。このようなタイトルを選んだのは、彼女があらゆるものにより困惑した、よそよそしい視線を向けるようにしたいと思ったからです。不安定な状態がつづくのです。

――これはあなたがイタリア語で書いた最初の長篇小説ですね。あなたを育てた言語である英語を離れることは、ご自分のルーツから離れる一つのかたちなのでしょうか？

すでに、『べつの言葉で』（新潮クレスト・ブックス）と『本の衣装』［訳者：二〇一五年六月にラヒリがフィレンツェで行なった講演をまとめた六十ページほどの小冊子。未邦訳］という二冊のエッセイをイタリア語で書いていますが、『わたしのいるところ』はたしかに英語を離れて書いた最初の長篇小説です。わたしにとってイタリア語は自分の外にあるものでした。つねに自分のことを、言語的にはよそ者だと感じています。この小説は、どこにいても居心地の悪さを感じて心の底からくつろげない、わたし自身の状況にこだわって書きました。つい自分の考えを英語で表現しようとしてしまうので、そうならないよう始終気をつけていないといけなかったのですが、いまではすっかり逆転しています。すべてがイタリア語で湧きだし、流れていきます。

いま、わたしの頭のなかには二つの部屋があります。いや、翻訳も加えると三つと言ったほうがいいでしょう。一つの部屋にはわたしが書くことを選んだイタリア語、もう一つには、アメリカの大学で教えている限り続く英語のプロジェクトが入っています［訳者：ラヒリが英語に翻訳したドメニコ・スタルノーネの *Lacci* 英題 *Trick* は二〇一八年全米図書賞翻訳書部門の最終選考五作品に残り、クレスト・ブックスより十一月に刊行予定。このときの受賞は、多和田葉子の『献灯使』］。

――この作品はあなたの創作活動における分岐点となりますね。

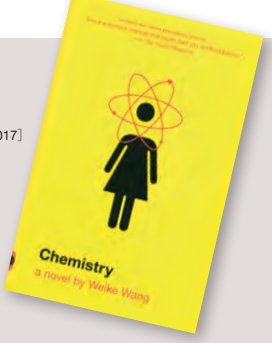
そうですね、言語だけでなくスタイルも変えるという選択を示していますから。これまでとは違うやり方で書きたいと思っています。これまでと違うやり方で世界を調べ、経験し、眺めたいのです。同じアイデンティティーをずっと保ちつづけることはできません。イタリア語で書くとき、わたしはもうそれまでとはべつの部屋にいるのですから。

Jhumpa Lahiri

1967年、ロンドン生まれ。両親ともインド・カルカッタ出身のベンガル人。2歳で渡米。大学、大学院を経て、99年「病気の通訳」でO・ヘンリー賞、同作収録の『停電の夜に』でピュリツァー賞、PEN／ヘミングウェイ賞、ニューヨーカー新人賞ほか受賞。2003年、長篇『その名にちなんで』発表。08年刊行の『見知らぬ場所』でフランク・オコナー国際短篇賞を受賞。13年、集大成となる長篇『低地』を発表。家族とともにイタリアに移住。15年、イタリア語によるエッセイ『べつの言葉で』発表。イタリア語の翻訳も手がける。

"Dove mi trovo", il primo romanzo in italiano di Jhumpa Lahiri by Carolina Germini
Copyright © La Repubblica,15 January 2019

photograph © Daniel Lee



Weike Wang
Chemistry［2017］

ユニークな語りの行間に滲む感情

ウェイク・ワン『ケミストリー』

小竹由美子訳　2019年9月刊行予定

人生に、恋に、煩悶するリケジョを描く
期待の中国系作家のデビュー作。

小竹由美子・文
text by Kotake Yumiko

昨年、ニューヨーカー誌掲載の短篇のタイトルにふと目を惹かれた。「Omakase」。中国系女性と白人男性のカップルが、日本人板前が握るニューヨークの寿司屋で「おまかせ」コースを味わう。コースが終わるまでのあいだに、男女の背景や力関係、無邪気で呑気な男に対する自意識過剰な女の苛立ち、日本人と中国人との間の微妙な感情までをも鋭く描き出す手腕に、一読して瞠目、作者ウェイク・ワンの処女作にして2018年度PEN／ヘミングウェイ賞受賞作『ケミストリー』も読んでみた。

こちらは、化学の博士号取得コースから脱落した中国系女性が、移民の苦労を重ねてきた両親にそれを打ち明けられず、今後の身の振り方も決まらず、容姿も頭脳も性格も申し分ない同棲中の白人の恋人から結婚を申し込まれても決心がつかず、何もかも宙ぶらりん状態で煩悶する日々が、暗喩的な科学の雑学を交えて一人称現在形で語られる。恋人エリック以外は名前が与えられず、直截で淡々とした語りなのだが、その行間にしばしば強い感情が滲む。ごく普通のアメリカ人として育った善良なエリックにとっての「当たり前」に語り手はいちいち躓き、自分や両親の来し方を振り返る。周囲の何気ない視線や言葉が、日々語り手に突き刺さってくる。そんな状況でもがきながらも先へ進む道が見えてきたところで、物語は終わる。このユニークなヴォイスをクレスト・ブックスからお届けできることになって、とても嬉しい。

作者は南京市出身。両親と共にオーストラリアとカナダ経由で11歳の時にアメリカへ。ハーバード大学で化学の学士号及び公衆衛生の博士号を、ボストン大学で美術学修士号を取得。全米図書協会の2017年度「35歳未満の注目作家5人」のひとりに選ばれている。本書はアマゾン・スタジオが映画化を検討中とのこと。

ただいま翻訳中！

今秋以降に刊行を予定している注目の作品を、
それぞれの翻訳者の方々にご紹介いただきました。
おなじみのシュリンクやウリツカヤをはじめ、
実力派作家の話題作が刊行されます。

photograph by Tsubota Futoshi

※タイトルはすべて仮題です。

『靴ひも』

ドメニコ・スタルノーネ
Lacci by Domenico Starnone
関口英子
text by Sekiguchi Eiko

アイロニーを得意とする熟練作家スタルノーネが、巧みな構成と執拗な内面描写によって、家族という閉じられた空間における深い確執を容赦なく暴いた意欲作だ。

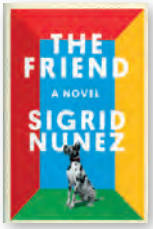
冒頭、夫に出ていかれ、子供二人を抱えて途方に暮れる妻が夫に宛てて綴った手紙が九通。それが第二部では一転、老齢に差し掛かった夫の視点から、五十年にわたる夫婦の営みが語られる。夫婦とはかくもすれ違うものなのか。家族をつなぎとめる絆とは何か。荒らされた家、いなくなった猫、消えた写真。宙に浮いた疑問は、第三部で、娘の立場から驚きの事実とともに明かされる。登場人物それぞれの苦悩から現代の家族が抱える問題が透けて見え、読後、ずしりと心に居座る。

イタリアで二〇一四年に発表された本書は、ジュンパ・ラヒリによって英訳され、『ニューヨーク・タイムズ』紙の年間ベスト本に選ばれた。

（二〇一九年十一月刊行予定）

『フレンド』

シーグリッド・ヌーネス
The Friend by Sigrid Nunez
村松潔
text by Muramatsu Kiyoshi



初老を迎えた女性作家が、長年の恩師であり、心を許せるただひとりの男でもあった相手をふいに失って、自分のなかにポッカリとあいた空洞を抱えながら、その空洞に問いかけるように、そっと書きつけていく日誌とも言うべき作品である。

男が残していった老いたグレートデン。ニューヨークの狭いアパートで、心ならずもこの〈やさしい巨人〉と同居することになる彼女は、自死について、喪失について、愛や友情のかたちについて、犬と人間の関わりについて、記憶や書くという行為について、この世界で作家であることの意味について、脳裏に去来する想念をたどり、心の底に揺らめく感情を覗きこみながら、静かに言葉を紡いでいく。

死や喪失、老いるということ、物言わぬ動物の苦痛を理解できない苦しさについて語りながらも、ほんのりとした慰めの感じられる読後感になっている。二〇一八年全米図書賞受賞作。

（二〇二〇年刊行予定）

『緑の天幕』

リュドミラ・ウリツカヤ

Зеленый шатер by Ludmila Ulitskaya

前田和泉

text by Maeda Izumi

本作の主人公は「時代」なのかもしれない。ごくありきたりな人物を淡々と、かつ陰影に富んだ筆致で描くことにかけては随一の名手ウリツカヤは、ソ連という国に生きた様々な登場人物一人一人を丁寧に写し取っていくことで、この国が辿った「時代」の息吹を浮かび上がらせる。ほんの脇役でさえも印象的だ。たとえばエリート編集長アントニーナ。イデオロギーに凝り固まった強圧的な人物で、家族に対しても常に厳しく接する彼女は誰からも愛されず、亡くなっても誰も悲しむことはない。だが、葬儀に出席するため十年ぶりにやって来た彼女の妹は、娘でさえ知らなかった思いがけない彼女の生い立ちについて語る……。他にも多彩な人々が登場するが、章によって「主役」が次々と入れ替わり、同じ人物も章によって異なる視点から描かれる。多くの人々が絡み合いながら織りなす物語は、多声が響き合うシンフォニーのような読後感。（二〇二〇年春刊行予定）

『死後』

ペーター・テリン

Post Mortem by Peter Terrin

長山さき

text by Nagayama Saki

もし自分がいま死んだら、幼い娘に父親の記憶は残らない。死後、伝記作家が描く自分を真の父親像と思い込んでしまうだろう。

作家のステーフマンはそれを防ごうと、自らの分身である作家（Tと命名）を主人公とした小説を書き残すことにする。著者テリンの創造であるステーフマンが、作中のT（＝テリン）を創るような複雑な入れ子構造が、読者に心地よい混乱をもたらす。

第二部は打って変わって脳梗塞で倒れた愛娘の闘病記。この悲痛なパートは、テリン自身の経験に基づくもので、病院にタイプライターを持ち込んで書いたという。第三部では伝記作家が小説『T』を残したステーフマンの謎に迫る。第二部の意味もここで明らかに。ベルギーのオランダ語圏、フランダースの作家テリンによる、娘と文学への愛にあふれる美しい小説。読み解く楽しみを味わっていただけるよう、全力で訳しています。

（二〇二〇年春刊行予定）

『オルガ』

ベルンハルト・シュリンク

Olga by Bernhard Schlink

松永美穂

text by Matsunaga Miho

『朗読者』で世界的なヒットを飛ばしたシュリンクの最新作は、ある女性の名前をタイトルに冠しています。

「オルガ」というスラブ系の名前に、深い意味があるんです。シュリンクが得意とするドイツ現代史とミステリーを絡めた内容に、十九世紀末から約九十年の激動の歴史を生き抜いた女性の一代記が重ねられていて、読みごたえは抜群！ しかもシュリンクの新境地ともいえる、女性の自分語りの声が、オルガの遺した手紙から聞こえてきます。

小説は三部構成で、第一部が三人称、第二部が男性の一人称、第三部がオルガの手紙、と変化に富み、最後にパズルの一片が嵌まってオルガの秘密が明らかになります。二度の世界大戦や植民地戦争、極地探検というスペクタクルもあり、訳していてもわくわく、どきどきするこの作品。今年の夏休み、ドイツで訳し終える予定です。がんばります！

（二〇二〇年春刊行予定）

新潮クレスト・ブックスがお届けする102タイトルをご紹介します。
（価格は税別です）

Shincho Crest Books Catalog 1998–2019

パリ左岸のピアノ工房
T・E・カーハート
村松潔訳

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように再生する名器の数々……。眠っていた音楽とピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

2000円
590027-4

停電の夜に
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

ろうそくの灯りの下、秘密の話を——。ピュリツァー賞ほか独占！インド系女性作家による驚異のデビュー短篇集。もはや古典的名作。

1900円
590019-9

朗読者
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

十五歳の少年ミヒャエルが経験した切ない初恋。母親のような年の女性ハンナを失踪させた秘密とは——。衝撃の世界的ベストセラー。

1800円
590018-2

ソーネチカ
リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

本の虫で、容貌のぱっとしないソーネチカ。最愛の夫の秘密を知ったとき彼女は……。神の恩寵に包まれた女性の静謐な一生の物語。

1600円
590033-5

灰色の輝ける贈り物
アリステア・マクラウド
中野恵津子訳

カナダ、ケープ・ブレトン島の苛酷な自然の中で、漁師、坑夫を生業とし、一族としての思いを胸に生きる人々。奇跡のような名短篇集。

1900円
590032-8

ウォーターランド
グレアム・スウィフト
真野泰訳

土を踏みしめていたはずの足元に、ひたひたと寄せる水の記憶——。ブッカー賞作家によるもっとも危険なもっとも愛すべき最高傑作。

2900円
590029-8

その名にちなんで
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

長く口にせずにきた思い。愛しい人を遠く焦がれる切なさ。名手ラヒリが精緻に描く人生の機微。ふかぶかと胸にしみる待望の初長篇。

2200円
590040-3

冬の犬
アリステア・マクラウド
中野恵津子訳

カナダ東端の島で、犬、馬、鷲ら動物とともに、祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。生の厳しさと美しさを湛えた八篇。

1900円
590037-3

シェル・コレクター
アンソニー・ドーア
岩本正恵訳

孤島で貝を拾い、静かに暮らす盲目の老貝類学者を襲った奇妙な騒動を描く表題作ほか、O・ヘンリー賞受賞作を含む鮮やかな全八篇。

1800円
590035-9

素数の音楽
マーカス・デュ・ソートイ
冨永星訳

神秘的な謎に満ちた数、素数。その不思議な美と今も続く天才たちの挑戦とは。小川洋子さん絶賛のスリリングなノンフィクション！

2400円
590049-6

彼方なる歌に耳を澄ませよ
アリステア・マクラウド
中野恵津子訳

18世紀末、スコットランドからカナダ東端の島に渡った赤毛の男がいた——。カナダの「静かな巨人」が描く、愛すべき一族の物語。

2200円
590045-8

ペンギンの憂鬱
アンドレイ・クルコフ
沼野恭子訳

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。新聞の死亡記事を書く仕事をきっかけに、身辺に不可解な出来事が次々に起こって……。

2000円
590041-0

イラクサ
アリス・マンロー
小竹由美子訳

一瞬が永遠に変わるさま。長い年月を見通すまなざし。長篇小説を凝縮したかのような味わいの、「短篇の女王」による九つの物語。

2400 円
590053-3

世界の果てのビートルズ
ミカエル・ニエミ
岩本正恵訳

笑えるほど最果ての村で、僕は育った。凍てつく川。薄明かりの森。そして手づくりの僕のギター！　スウェーデンの傑作長篇小説。

1900 円
590052-6

ある秘密
フィリップ・グランベール
野崎歓訳

孤独な少年の夢想が残酷な過去を掘り起こす。禁断の恋。懊悩。そしてホロコースト。一九五〇年代のパリを舞台にした自伝的長篇。

1600 円
590051-9

海に帰る日
ジョン・バンヴィル
村松潔訳

海に消えた少女の記憶が、今もわたしを翻弄する。荒々しく美しい、あの海のように。アイルランド随一の文章家のブッカー賞受賞作。

1900 円
590061-8

千年の祈り
イーユン・リー
篠森ゆりこ訳

長い祈りに支えられた父娘の縁。人生の黄昏にある男女の情愛……。オコナー賞、ヘミングウェイ賞ほか総なめの驚異のデビュー短篇集。

1900 円
590060-1

林檎の木の下で
アリス・マンロー
小竹由美子訳

スコットランドの寒村から新大陸カナダへ——。三世紀の時を貫く作家自身の一族の物語。落ちついた声、天才的な筆捌き。12 の自伝的短篇。

密会
ウィリアム・トレヴァー
中野恵津子訳

早朝のオフィス、カフェの片隅の定席、離婚した彼女の部屋。秘めた二人の愛の決断とは。「英語圏最高の短篇作家」による十二篇。

1900 円
590065-6

ペット・サウンズ
ジム・フジーリ
村上春樹訳

恋愛への憧れ、父との確執、麻薬、肥満……。ビーチ・ボーイズの最高傑作『ペット・サウンズ』は、壮絶な戦いの記録でもあった。

1600 円
590064-9

土曜日
イアン・マキューアン
小山太一訳

ロンドン、午前四時。未明の空に火を噴く飛行機。テロか？　それとも？　名匠の優美極まる筆致で描かれる、脳外科医の不穏な一日。

2200 円
590063-2

最終目的地
ピーター・キャメロン
岩本正恵訳

ウルグアイの邸宅で繰り広げられる愛の物語。英国古典小説の味わいをもつ滑稽でエレガントな傑作長篇。アイヴォリー監督により映画化。

2400 円
590075-5

記憶に残っていること
アリス・マンロー他
堀江敏幸編

世界最高の短篇小説をこの一冊に。マンロー、トレヴァー、ラヒリ、マクラウド、イーユン・リー……創刊から 10 年間の全短篇集から厳選。

1900 円
590070-0

見知らぬ場所
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

父と母の、子供たちの、恋人たちの歳月。『停電の夜に』以来九年ぶり、世界待望の最新短篇集。フランク・オコナー国際短篇賞受賞！

2300 円
590068-7

サラの鍵
タチアナ・ド・ロネ
高見浩訳

パリの女性記者と、ナチに連行された少女。六十年の時を越え、二つの人生が交錯する——累計三百万部のベストセラー。映画化原作。

2300 円
590083-0

初夜
イアン・マキューアン
村松潔訳

ずっと二人で歩いていけたかもしれない。あの夜の出来事さえなければ。遠い日の愛の記憶を克明かつ繊細に描く、異色の恋愛小説。

1700 円
590079-3

通訳ダニエル・シュタイン 上・下
リュドミラ・ウリツカヤ
前田和泉訳

ゲシュタポでナチスの通訳をしながらユダヤ人脱走計画を成功させた男。後にカトリック神父となりイスラエルに渡るその激動の生涯。

上 2000 円
下 2200 円
590077-9,78-6

小説のように
アリス・マンロー
小竹由美子訳

夫を子連れの女に奪われた音楽教師。今は幸福に暮らす彼女の前に過去を思わせる小説が現れて ――。「短篇の女王」による十の物語。

2400 円
590088-5

黙禱の時間
ジークフリート・レンツ
松永美穂訳

ギムナジウムで開かれた追悼式。遺影を見つめる少年に甦る、美しい教師とのひと夏の想い出。巨匠による、海に彩られた純愛小説。

1600 円
590086-1

いちばんここに似合う人
ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

孤独な魂たちが束の間放つ生の火花を、切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。

1900 円
590085-4

ソーラー
イアン・マキューアン
村松潔訳

太陽光発電でひと儲けを企む狡猾で好色なノーベル賞科学者。だが懲りない彼の人生にも暗雲が ――。現代社会を笑いのめす長篇小説。

2300 円
590091-5

週末
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

テロリストが二十年ぶりに出所した週末。旧友たちの胸に甦る、恋、確執、未来への祈り。『朗読者』の著者が描くもう一つの「戦争」。

1900 円
590090-8

オスカー・ワオの短く凄まじい人生
ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳

オタク青年オスカーの悲恋の陰には、一族が背負った呪いがあった。全米批評家協会賞・ピュリツァー賞をダブル受賞した傑作長篇。

2400 円
590089-2

残念な日々
ディミトリ・フェルフルスト
長山さき訳

貧しく、下品で、誇り高い。のんだくれの父一族との少年時代。心をつかんで離さない、ベルギーの俊英による自伝的連作短篇集!

1900 円
590094-6

ロスト・シティ・レディオ
ダニエル・アラルコン
藤井光訳

ある朝ラジオ局を訪れた少年の手には、無数の行方不明者たちのリストが握られていた。ペルー系アメリカ人作家によるデビュー長篇。

2100 円
590093-9

メモリー・ウォール
アンソニー・ドーア
岩本正恵訳

記憶再生装置を手に入れた認知症の老女。ダムに沈む山村の人々。戦地でツルに出会う米兵。記憶をめぐる静謐で雄大な六つの物語。

2000 円
590092-2

手紙
ミハイル・シーシキン
奈倉有里訳

戦争に行った若者と残された少女。ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。

2400 円
590097-7

タイガーズ・ワイフ
テア・オブレヒト
藤井光訳

「不死身の男」と「トラの嫁」。二つの物語が、祖父の人生の謎を浮き彫りにする ――。本屋大賞翻訳小説部門第一位。驚異のデビュー作。

2200 円
590096-0

女が嘘をつくとき
リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

夏の別荘で、波瀾万丈の生い立ちを語るアイリーン。ところがその話はほとんど嘘で……。嘘をつく女たちの哀しくも微笑ましい人生。

1800 円
590095-3

夏の嘘
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

避暑地で出会った男女。癌を患う大学教授。作家とその夫。小さな嘘をきっかけに秘められた思いが溢れ出す。著者十年ぶりの短篇集。

2000 円
590100-4

終わりの感覚
ジュリアン・バーンズ
土屋政雄訳

精緻、深遠、洗練。四度目の候補にしてブッカー賞受賞。英国を代表する作家の、時間と記憶をめぐる優美でサスペンスフルな中篇。

1700 円
590099-1

祖母の手帖
ミレーナ・アグス
中嶋浩郎訳

サルデーニャの祖母が愛した「帰還兵」。イタリアの新鋭による、ひたむきで官能的な愛の物語。美しい器楽曲を思わせる小さな本。

1600 円
590098-4

こうしてお前は彼女にフラれる

ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳

どうしていつも、うまくいかないのか？　浮気男ユニオールとたくさんの女たちが繰り広げる、おかしくも切ない九つの愛の物語。

1900 円
590103-5

イースタリーのエレジー

ペティナ・ガッパ
小川高義訳

繊細な情感。とぼけた味わい。さまざまな階層のジンバブエの人々の日常をモザイクさながらに描きだした類まれなデビュー短篇集。

1900 円
590102-8

アンネ・フランクについて語るときに僕たちの語ること

ネイサン・イングランダー
小竹由美子訳

コミカルな語りに深い倫理性。人間の普遍を描きだす啓示のような物語。フランク・オコナー国際短篇賞受賞作。

1900 円
590101-1

ディア・ライフ

アリス・マンロー
小竹由美子訳

2013 年ノーベル文学賞を受賞した短篇小説家が、透徹した眼差しと眩いほどの名人技で描きだす平凡な人々の途方もない人生の深淵。

2300 円
590106-6

いにしえの光

ジョン・バンヴィル
村松潔訳

姿を消した人気女優と後を追う老俳優の、奇妙な逃避行。いくつかの曖昧な記憶が不意に新しい像を結ぶ。ブッカー賞作家の新境地。

2100 円
590105-9

美しい子ども

ジュンパ・ラヒリ他
松家仁之編

シリーズ創刊 15 周年を記念して、全 101 篇から選んだ傑作短篇アンソロジー。ラヒリ、ミランダ・ジュライ、マンロー、シュリンクほか。

1900 円
590104-2

大いなる不満

セス・フリード
藤井光訳

なぜか毎年繰り返される、死者続出のピクニック。平均寿命一億分の四秒の微小生物。不条理と笑いに満ちた圧倒的デビュー短篇集。

1800 円
590109-7

遁走状態

ブライアン・エヴンソン
柴田元幸訳

前妻と前々妻に追われる元夫。勝手に喋る舌を止められない男。明晰に語られる十九の悪夢。ホラーも純文学も超える驚異の短篇集。

2100 円
590108-0

もう一度

トム・マッカーシー
栩木玲子訳

謎の事故で記憶を失い、巨額の示談金を得た男。失われた自分は、莫大な金で取り戻せるのか？　絶賛と論争を呼んだ痛快な異色作。

2100 円
590107-3

甘美なる作戦

イアン・マキューアン
村松潔訳

MI5 の美人スパイと若き小説家。二人の愛は幻だったのか？　自伝的で小説論的。ブッカー賞作家による野心あふれる恋愛小説。

2300 円
590111-0

低地

ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

インド民主化運動のなか殺された弟。その身重の妻をアメリカに連れ帰った兄。愛と失意が織り成す波乱の家族史。待望の長篇小説。

2500 円
590110-3

ハイウェイとゴミ溜め

ジュノ・ディアス
江口研一訳

『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』の著者による伝説的デビュー作。全米最優秀短篇に選出された「イスラエル」ほか全十篇。

1900 円
590004-5

善き女の愛

アリス・マンロー
小竹由美子訳

誰にも覚えのある家族間の出来事を見事なドラマとして描きだす、マンローの金字塔的短篇集。1998 年度全米批評家協会賞受賞作。

2400 円
590114-1

マリアが語り遺したこと

コルム・トビーン
栩木伸明訳

母マリアによるもう一つのイエス伝。「聖母」ではなく人の子の母としてのマリアが語る、美しく果敢な独白小説。ブッカー賞候補作。

1600 円
590113-4

光の子供

エリック・フォトリノ
吉田洋之訳

私の母は誰なのか――。パリを舞台に、映画と現実を往来するある男の愛の彷徨。ル・モンド紙元編集長による《フェミナ賞受賞作》。

1800 円
590112-7

ヴォルテール、ただいま参上!

ハンス＝ヨアヒム・シェートリヒ
松永美穂訳

尊敬と反発、女性関係に金銭トラブル。ヴォルテールとフリードリヒ大王の知られざる素顔を描く、笑いと驚きの新しい歴史小説。

1600 円
590117-2

突然ノックの音が

エトガル・ケレット
母袋夏生訳

しゃべる金魚。神様の本音。ままならぬセックス。そして突然のテロ――。イスラエルの人気作家の掌篇集。オコナー賞最終候補作。

1900 円
590116-5

風の丘

カルミネ・アバーテ
関口英子訳

古代遺跡の夢。ファシズムとの戦い。一族の秘密。イタリア最南端、風の強い丘に暮らす家族四代の物語。カンピエッロ賞受賞。

2100 円
590115-8

べつの言葉で

ジュンパ・ラヒリ
中嶋浩郎訳

「私にとってイタリア語は救いだった」――夫と息子たちとともにローマに移住した作家が綴ったイタリア語による初エッセイ。

1600 円
590120-2

あなたを選んでくれるもの

ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

映画の脚本執筆に行き詰まった著者は、フリーペーパーに売買広告を出す人々を訪ねる。カラー写真満載、心を打つインタビュー集。

2300 円
590119-6

子供時代

リュドミラ・ウリツカヤ
絵 ウラジーミル・リュバロフ
沼野恭子訳

中庭のあるアパートに住む子供たちが出会った奇跡。「キャベツの奇跡」「折り紙の勝利」等、祝福されたかけがえのない瞬間に心打たれる 6 篇。

1800 円
590118-9

夜、僕らは輪になって歩く

ダニエル・アラルコン
藤井光訳

内戦終結後に再結成された伝説の小劇団。十数年ぶりの公演旅行は、ある嘘をきっかけに思わぬ方向へ。ペルー系作家による話題作。

2200 円
590123-3

未成年

イアン・マキューアン
村松潔訳

輸血を拒む少年と彼を救おうとする女性裁判官。運命と信仰をめぐる激しい葛藤、恋にも似た思い。ブッカー賞作家による傑作長篇。

1900 円
590122-6

文学会議

セサル・アイラ
柳原孝敦訳

小説家でマッド・サイエンティストの〈私〉は文学会議に出席する文豪のクローン作製を企むが。アルゼンチンの奇才が放つ衝撃作!

1700 円
590121-9

あの素晴らしき七年

エトガル・ケレット
秋元孝文訳

愛しい息子の誕生からホロコーストを生き延びた父の死までの、悲嘆と哄笑と祈りに満ちた七年。イスラエル作家の自伝的エッセイ集。

1700 円
590126-4

屋根裏の仏さま

ジュリー・オオツカ
岩本正恵・小竹由美子訳

20 世紀初頭、「写真花嫁」としてアメリカに渡った少女たち。そのささやきが圧倒的な声になって立ち上がる全米図書賞候補作。

1700 円
590125-7

陽気なお葬式

リュドミラ・ウリツカヤ
奈倉有里訳

自分のお葬式が愛で満たされるように願う亡命ロシア人画家アーリクの最期の贈り物とは――不思議な祝祭感と幸福感が溢れる物語。

1800 円
590124-0

すべての見えない光

アンソニー・ドーア
藤井光訳

ドイツの若い技術兵と、フランスの盲目の少女の心を繋いだのは、ラジオから流れる懐かしい声だった――。ピュリツァー賞受賞作。

2700 円
590129-5

誰もいないホテルで

ペーター・シュタム
松永美穂訳

森の中の宿で。リノベーションされた工場跡地で。音楽フェスの夜に。心をとらえ、運命を動かす瞬間。スイス人作家による短篇集。

1700 円
590128-8

煉瓦を運ぶ

アレクサンダー・マクラウド
小竹由美子訳

その後の人生を一変させる決定的瞬間を、瑞々しい筆致で描き出す。故アリステア・マクラウドの息子による鮮烈なデビュー短篇集。

1900 円
590127-1

ウインドアイ
ブライアン・エヴンソン
柴田元幸訳

妹はどこへ消えたのか。それとも、妹などいなかったのか？　滑稽でいてひどく切実な、不安と恐怖。『遁走状態』に続く待望の短篇集。

2000 円
590132-5

ジュリエット
アリス・マンロー
小竹由美子訳

母と娘、そのまた娘。届かない互いの思いを諦観とともに描くアルモドバル監督映画化の連作など、ビターなマンロー全開の傑作短篇集。

2400 円
590131-8

四人の交差点
トンミ・キンヌネン
古市真由美訳

異なる時代を生きた四人の喜びと痛みの記憶が、やがて一つの像を結ぶ。フィンランドで記録的ベストセラーとなった、ある家族の物語。

2200 円
590130-1

ふたつの海のあいだで
カルミネ・アバーテ
関口英子訳

ある日、姿を消した祖父。《いちじくの館》再建の夢はいかに――。イタリアの人気作家が描く、土地に深く根ざした強靭な物語。

1900 円
590135-6

ビリー・リンの永遠の一日
ベン・ファウンテン
上岡伸雄訳

イラクから帰還し、戦意高揚のショーに駆り出された兵士。過酷な戦場と愚かな狂騒の、その途方もない隔絶。全米批評家協会賞受賞作。

2300 円
590134-9

本を読むひと
アリス・フェルネ
デュランテクスト冽子訳

パリ郊外の荒れ地に暮らす文字を知らないジプシーの大家族と、彼らに本を読む歓びをもたらした図書館員。フランスのロングセラー！

1900 円
590133-2

階段を下りる女
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

名画とともに異国に消えた謎の女。消そうとして消せなかった彼女の過去とは？ 一枚の絵をめぐるドイツのベストセラー作家の新境地。

1900 円
590139-4

五月の雪
クセニヤ・メルニク
小川高義訳

仄暗い歴史を背負う極寒の町マガダン。この土地で暮らす人々の哀しみと喜び。米国注目のロシア系移民作家による、鮮烈な連作短篇集。

2000 円
590137-0

人生の段階
ジュリアン・バーンズ
土屋政雄訳

悲しみの回帰線を超えて――誰かの死は、その存在が消えることまでは意味しない。公私ともに最高の伴侶を亡くした作家の思索と回想。

1600 円
590136-3

運命と復讐
ローレン・グロフ
光野多恵子訳

それは結婚という名の壮大な悲喜劇。巧みなプロットと古典劇の文学性を併せ持ち、オバマ前大統領も愛読した圧巻の大河恋愛小説！

2700 円
590141-7

おじいさんに聞いた話
トーン・テレヘン
長山さき訳

ハッピーエンドのお話はないの？ ロシア生れの祖父が語る悲哀に満ちた人生の物語。『ハリネズミの願い』の作家による愛すべき掌篇集。

1800 円
590140-0

オープン・シティ
テジュ・コール
小磯洋光訳

マンハッタンを日ごと彷徨する若き精神科医。時折よみがえる遠い国の記憶。数々の賞に輝いたナイジェリア系作家によるデビュー長篇。

1900 円
590138-7

昏い水
マーガレット・ドラブル
武藤浩史訳

70 代後半を迎えたドラブルが、同世代の枯れない女たち男たちの老いの姿をいきいきと描く、まさに英国的苦みの効いた長篇小説。

2300 円
590144-8

ファミリー・ライフ
アキール・シャルマ
小野正嗣訳

家族の暮らしを一変させた、あの夏の事故。意識が戻らぬ兄、疲弊する両親、悲しみの中で成長する弟。愛情と祈りに満ちた家族小説。

1800 円
590143-1

ノーラ・ウェブスター
コルム・トビーン
栩木伸明訳

夫を亡くし、21 年ぶりに勤めに出たノーラ。慎ましく不器用な主婦が、生きる歓びを見出してゆく姿を母に重ねて描く自伝的長篇。

2400 円
590142-4

憂鬱な10か月
イアン・マキューアン
村松潔訳

1800 円
590147-9

胎内から窺い知る、まだ見ぬ人間達の世界。愛と裏切り、そして犯罪の気配。英国の名匠による、苦い笑いに満ちた極上の名篇。

知の果てへの旅
マーカス・デュ・ソートイ
冨永星訳

2700 円
590146-2

宇宙に果てはあるのか。時間とは意識とは？ はたして科学は全てを知りえるのか。『素数の音楽』の著者による知の限界への挑戦。

マザリング・サンデー
グレアム・スウィフト
真野泰訳

1700 円
590145-5

メイドに許された年に一度の里帰りの日曜日、ジェーンの人生は自由の色に輝き始める。ブッカー賞作家が熟達の筆で描く珠玉の物語。

最初の悪い男
ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

2200 円
590150-9

愛するベイビー、いつになったらまたあなたをこの腕に抱けるの？どこまでも奇妙でなにより切実な愛に導かれた、感動の初長篇。

ガルヴェイアスの犬
ジョゼ・ルイス・ペイショット
木下眞穂訳

1900 円
590149-3

空から巨大な物体が落ちてきて、村はすっかり変わってしまった。権威あるオセアノス賞を受賞。奇想天外なポルトガルの傑作長篇。

戦時の音楽
レベッカ・マカーイ
藤井光訳

2000 円
590148-6

ベスト・アメリカン・ショート・ストーリーズに 4 年連続選出。戦争と音楽、幻想と歴史の間をたゆたう、短篇の名手による 17 篇。

帰れない山
パオロ・コニェッティ
関口英子訳

2050 円
590153-0

山がすべてを教えてくれた。アルプス山麓を舞台に、本当の居場所を求めて彷徨う二人の葛藤と友情を描く、国際的ベストセラー。

両方になる
アリ・スミス
木原善彦訳

2400 円
590152-3

時空を超えて響きあう二つの物語は、虚構と事実の境界を塗り替え、再読時に全く違う姿を見せる。楽しさと驚きに満ちた長篇小説。

変わったタイプ
トム・ハンクス
小川高義訳

2400 円
590151-6

世界的名優は、短篇小説のおそるべき名手でもあった！ 人生のひとコマを鮮やかに切り取る、優しさとユーモアにあふれた 17 の物語。

波
ソナーリ・デラニヤガラ
佐藤澄子訳

2000 円
590156-1

わたしの人生にはすべてがあった。あの波が来るまでは―― 2004 年、突然の津波で家族を失った経済学者が綴る、絶望と再生の手記。

ミッテランの帽子
アントワーヌ・ローラン
吉田洋之訳

1900 円
590155-4

その帽子を手にした日から、冴えない人生は美しく輝きはじめる。1980 年代のパリを舞台にした、大人のための幸福なおとぎ話。

ピアノ・レッスン
アリス・マンロー
小竹由美子訳

2200 円
590154-7

後のノーベル賞作家は、デビュー時にすでに「短篇の女王」だった。人生の陰翳を描き読者を魅了する名匠の原風景が詰まった作品集。

わたしのいるところ
ジュンパ・ラヒリ
中嶋浩郎訳

1700 円
590159-2
【最新刊】

ローマと思しき町に暮らす「わたし」の、なじみの場所にちりばめられた孤独と彼女の旅立ちの物語。イタリア語による初めての長篇。

ある一生
ローベルト・ゼーターラー
浅井晶子訳

1700 円
590158-5

アルプスの山とともに、20 世紀を生きた名もなき男の生涯がなぜこんなにも胸に迫るのか。現代オーストリア文学の恩寵に満ちた物語。

トリック
エマヌエル・ベルクマン
浅井晶子訳

2500 円
590157-8

プラハに生まれナチス政権下を生き抜いた老マジシャンと、魔法を信じるLA の少年。それぞれの艱難を抱えた出会いが奇跡を起こす。